

ということ。この言葉は、私の人生に対する考え方、生き方を大きく変えてくれた。

一緒に生活している家族、いつも一緒にいてくれる友達。その大切な人に関わるすべての事をしっかり見つめ直す機会をこの本は与えてくれた。もしその存在がこの世界からいなくなったなら、何を思い、何を考えるだろうか。これからそれを経験するときは必ず来る。それによって自分がどう変わるかは分からないけれど、その人に対して本当にもう何もできなくなる。何度考えても後悔、辛いという一言では言い表せないような感情を彼から感じた。また、彼女が言っていた、みんなが関わってくれているから私がいるということ。このことを忘れずにこれからの日記には自分の周りの人の事もたくさん書いていく。それが私の生きた証だと思う。常日頃から大切な人への感謝を忘れずに今日を精一杯生きていきたい。

『君の臍臓をたべたい』 住野よる 著 双葉社

〈詫間キャンパス エッセイ〉

最優秀

迷い

通信ネットワーク工学科4年 田中 那奈

今年二十歳になった、そんな私には悩みがある。それは、これまでずっと迷い続けてきてきたのに二十歳になった今も尚、迷い続けていることだ。最近では迷うということが何なのかすら、よくわからなくなってきた。一般的に『どうしたらよいか決断がつかないこと』を迷っているというらしい。ああ、その通りだ。迷っている中で心が乱れてよくない方向へ進んで行くという場合も多いらしい。さらに、迷っていることは、現状維持とイコールで結ばれるため少し危険だ。現状維持をするということは、進展しないということ。つまり、他者から見て遅れをとることだと私は考える。しかし、こんな話をしておきながらではあるがそもそも私は何に迷っているのだろうか。

よく聞く就職か、進学か、そんなものではなくもっと根本的なところから迷って迷走しているのが私だ。最近では、唐突に“自分は何のために生きているのか”“課せられた使命は何か”“生きているうちに何ができるのか”こんなことを疑問に浮かべ周囲にいる人に質問するようになってしまった。そして、答えを見つけれずただ一人、迷い続けるのだ。この様な迷いを持ち始めたのはいつからかわからないが、強く迷うようになったのは去年の春を越したあたりからだ。

去年の春、私は語学学習の為フィリピンにあるセブ島に滞在していた。そこで見た光景は今でも鮮明に目の裏に焼き付けられている。そこには少子高齢化が進み続けている日本と違って、子供が沢山いた。ただ、その子供が

育っていく環境は日本とは大きく異なる。生活保護などの制度がない国であるから、何といても貧富の差が激しい。立派な家に住み、十分な食事を与えられる者もいたら、その一方で貧しい人たちにとっては、家がない、お風呂に入れない、そんなことは当たり前だった。1日3食の食事を確保するなんて夢の話だし、学校なんて行けるはずがない。罪があるわけでも無いのに、生まれた時からこんな環境で多くの子供達は育っていく。同じ国で育っても自国の言葉を喋れない者だっていた。そして、その光景を初めて目の当たりにした時、私は思わず泣いてしまった。それから半年間フィリピンに滞在し、その間様々な活動をしてきたが、今となっては結局私がしてきたことなどただのその場しのぎの行いに過ぎなかったとさえ感じられる。

フィリピンでの思い出を胸に、帰国してから強く思うことがある。もちろん生活していくためにはお金が必要で、お金を稼ぐためには働かなければならない。しかし、そのためだけに一生を捧げるのは勿体無いということだ。言葉だけでは終わらせたく無い、誰かの命や笑顔のために、本当のスーパーマンになりたいという想いをここに綴る。だからもう少し、迷わせてください。迷いから抜け出した自分は何を考え、どんな目標を持って日々生活しているのだろうか。

優秀

時間と心

電子システム工学科3年 秋田 陽介

唐突だが、皆さんは「時間」について考えたことがあるだろうか。おそらくこの質問に対して「時間についてとか一々考えたことねーよ。てか、考える必要くない。」と多くの人が思うだろう。しかし、私はこの夏休みを利用して「時間」について深く考えてみた。今から私なりの「時間」についての解釈を述べようと思う。

「時間」は世界中の生物に、差別なく、常に同じ早さで流れている。それは、これから何があろうとも、変わることのない事実であり、誰もがそう思っているであろう。しかしこれは、あくまで「時間」というものを理論的に解釈した場合である。

でも、実際私たちが感じる「時間」は理論的解釈の「時間」と同じなのだろうか。学校生活を思い出してほしい。苦手な教科、苦手な先生の授業時間はとても長く感じたことはないだろうか。逆に、自分の得意な教科、好きなことをしている時はあっという間に過ぎたことだろう。本来、一定に流れるはずの「時間」にあたかも緩急があるかのように。なぜ、この様に感じてしまうのだろうか。

それは、私たちが人間であり「心」を持っているからだ。「心」が、「時間」への感じ方を変えてしまっているのだ。特に思春期の「心」は数え切れないほど揺れ動き、それと同時に、人間の命をも奪いかねないほど強大でもある。例えるならば、学校でのいじめによる自殺だ。学校

に通う時期は、ちょうど思春期と重なるため、「心」が最も揺れ動き、多種多様な性格の人間がつくられる。この時に少数ではあるが、いじめを行う性格の人間も生まれてしまうために、いじめが無くならない。おそらく、人間に「心」がある以上いじめは無くならないだろう。しかし、「心」があることは悪いことだけではない。「心」が無ければ、友人と一喜一憂することはできないし、部活で仲間と同じ目標に向かって頑張ることもできない、また、異性との会話にドキドキすることもない。これほどまでに思春期というのは、「心」の振れ幅が大きいのだ。だから、高校の3年間というのはものすごいスピードで過ぎていくが、とても重要でもある。

これまで、「時間」と「心」について具体例を挙げながら多くのことを述べてきた。それらを踏まえ、私は「時間」と「心」の関係についてこう結論づけた。

「心」の変化によって「時間」の感じ方をコントロールすることができる、反対に「時間」によって、「心」をコントロールすることもできる。

先ほど例で挙げたが、楽しいことをしていると「時間」は早く、逆に嫌なことをしているときは遅く感じる。これは、「心」によって「時間」がコントロールされているのだ。逆に、「時間」によって「心」をコントロールする例と言えば、夏休みの宿題だろう。期限までに終わらせなければ、という「心」を抱いた人が大半だろう。しかし、今挙げた二つの例に当てはまらない人もいるだろ

う、変な例えだなんて思う人もいるだろう。

でも、とりあえずこれだけは言わせてほしい。

「心」という、とても抽象的なものを理解し自分でコントロールすることができれば、「時間」いや「人生」そのものをより有意義に過ごすことができるのではないだろうか。

〈詫間キャンパス 小説〉

優 秀

夢なんて持つものではない

情報工学科2年 平岡 将

【あらすじ】

とある大学病院の一室。これは、ここに集う三人の物語。病にとらわれ、来るかもわからない臓器を待ち続ける移植患者の話。

死の恐怖におびえながら、彼らは「日常」に憧れる。

今日もいつもと変わらない「待つ」日々が始まる。しかし、そんな日々は唐突に終わりを迎える。

友人の死、仲間の夢。それを目のあたりにした主人公は、何を思い、何を考えるのか。

これは彼らが「待ち」続けた日々の終わりまでを描く話。

〈詫間キャンパス 短歌〉

最優秀

ミンミン シャンシャン ツクツクホウシ ジツ ぼとり 晩夏の風に

電子システム工学科3年 間部 帆乃夏

優 秀

「災害」

台風が 何かをさらい 通過した 笑顔か花か 思い出かな

電子システム工学科4年 福田 勇太

優 秀

「夏の思ひ出。」

サーサーと 海辺で聞きし その音に 幼き頃を 懐かしみけり

1年2組 秋山 大翔

〈詫間キャンパス 俳句〉

最優秀

幼な手で そっと包みし 姫蛭

通信ネットワーク工学科4年 監崎 悠平

優 秀

夕焼や 旅の終わりの 瀬戸のはし

電子システム工学科3年 塩冶 卓也

優 秀

片隅で おいていかれる 空蝉か

電子システム工学科3年 徳武 詩穂

教員によるエッセイ

本を読むのが苦手な方へ

高松キャンパス

一般教育科 白石 希典

安心してください、苦手でも宇宙論の研究者にはなれるみたいです。僕の話を読みますと、文学作品(?)は学校の授業や受験勉強以外では、ほぼほぼ読んだ記憶がないです。漫画すら読むのが面倒で、テレビばかり見て育ちました。そんな僕でも、数少ない読了本がありまして、それは家どころがっていた宇宙論関連の啓蒙書です。宇宙の話題にはなにかと好奇心を掻き立てられるものであり、つつい手にとってしまったわけです。結局それが1つのきっかけとなり、現在宇宙論研究を生業としているのですが、それらの本にまつわる思い出を少し紹介したいと思います。

○ Steven W. Hawking 著「ホーキング、宇宙を語る」

現代物理学の根幹をなしている相対論と量子力学をベースにした現代宇宙論の展開が丁寧に描かれている本です。僕にとってはこの本が理論物理屋との初対面だったわけですが、数式を使わず柔らかく説明するという旨のもと比喩的な話がしつこいほどに満載だったので、理論物理屋というのはなんて妄想力たくましい人たちなんだとワクワクしたのを覚えています。実際、アカデミアはさまざまなベクトルを持ったユニークな人々で溢れており、毎日が新鮮です。

理論物理屋は、観測事実や法則を微分積分方程式で表現し、その数学解から起こりうる物理現象をイメージ化します。重力を記述するアインシュタイン方程式の解から動的な宇宙像、つまり、宇宙は普遍的なものではなく始まりや終わりがあるというイメージが導き出されるのです。数学は宇宙の根本にかかわる哲学的な疑問の答えを与えてくれる魔法の杖であり、また、理論物理屋 = 哲学者という感覚を持ったのもこの本がきっかけのような気がします。なお、10年近く前にCERNにて生ホーキングさんをお見かけしましたが、さすが別次元のオーラを

お持ちでした。

○ João Magueijo 著「光速より速い光」

筆者のマゲイジョさんが考案した光速変動理論 (VSL理論) の解説本です。当時、「光速は不変である」という概念が僕の中で一人歩きしてしまっていて、それは天才アインシュタインさんの作った相対論の土台となる原理なので、それを覆すなんてこの人正気かと心配になりました。が、よく読むと、光速不変というのはあくまで「現在」観測された結果であり、観測できていない遠い過去や未来では変わっても問題ないというカラクリがあることに気づきます。そりゃそうかもしれないですけど、、、という感じでしたが、大学4年生になりいざ宇宙論業界に飛び込んでみて、宇宙モデルや重力理論はそれこそ星の数ほど存在することを知りました。我々は、意中の宇宙モデルがある場合、観測データとの整合性を多角的に検証しその正当性を判断しますが、このプロセスを「このモデルでちょっと遊んでみる」と言ったりします。もちろん既存の理論をリスペクトしていますが、フットワークの軽さが宇宙論屋の売りなのです。むしろ、既存の理論には抜け道が必ずあるということが、研究活動における指導原理やモチベーションになっているようにも思います (だからこそ、真実とはどこにあるのかという疑問にいつも悩まされているわけですが)。

そして、VSL理論もさることながら、この本の最大の魅力は、理論物理屋の生態や社会的立場、基礎科学界の現状などが赤裸々に描かれているというところにあります。舞台は一番前のイギリスですが、現代の日本においても共感できる部分が多々あります。

くせの強い思い出話になってしまったので本の魅力が伝わったかどうかは大いに疑問ですが、みなさんも読んでしまえる本にいつか出会えるかもしれません。宇宙論業界に関して言えば、重力波の発見や定期的なノーベル賞受賞など明るいニュースが多く、宇宙観測の飛躍的な進展によってこれまでの謎が今後一気に解明されていく可能性もあります。もし宇宙に興味があれば、啓蒙書をゆっくり読むのもいいと思いますし、「ニュートン」や「日経サイエンス」などの科学雑誌では最新の研究成果が綺麗なイラスト付きで易しく解説されていますので、それらを眺めるだけでも幸せな気分になれるのではないでしょうか。

図書委員長より

図書館利用のすすめ

詫間キャンパス 図書委員長
大井 一輝



僕が図書館利用をすすめる理由は3つあります。1つ目は、国家資格を取得するのに役立つ本が数多くあるからです。現在所属している通信ネットワーク工学科では、第1級陸上無線技術士や第2級陸上無線技術士の国家資格の取得に力を入れていて、僕が第2級陸上無線技術士の国家資格を取得するための勉強をした時も、図書館にある国家資格の本がとても役立ちました。来年の1月には第1級陸上無線技術士の試験を受けますが、その勉強

でも図書館を利用しようと思います。2つ目は、進学に役立つ本が多くあるからです。例えば大学編入のための数学問題集や電気回路、電子回路、電磁気学の問題集、また、どの大学がどのような編入試験を実施しているかを詳しく書いている本もあります。僕は進学するのでこれらの本は役に立ちました。3つ目は、就職に役立つ本もたくさんあるからです。就職の試験ではSPI、電気会社であれば回路の問題、方程式や三角関数など数学の問題も出るそうです。図書館にはSPIの対策問題集、回路の問題集、三角関数などが詳しく書かれている本があります。この3つが図書館利用をすすめる理由です。図書館にある、国家資格の取得に役立つ本、進学や就職の試験で役立つ本をたくさん活用すると、自分の将来のためにもなると思います。図書館の本をたくさん利用して目標を達成できるように頑張ってください。

「深く読む」

高松キャンパス 図書委員長
宇佐美 太朗



みなさんは『徒然草』という作品をご存知でしょうか。誰もが一度は聞いたことがある有名なこの作品ですが、文中に出てくる「つれづれ」という言葉の意味を理解している人は少ないことでしょう。実は、「つれづれ」という言葉にはたくさんの意味が込められています。その意味を読み解けるようになるには、本をたくさん読み、文章に慣れ、そして読解力を身につけることが一番の近道であると思います。今回は、『徒然草』に隠された真の意味を解説しながら、「深く読む」ことの大切さを述べていこうと思います。

まず、「つれづれ」とは現代語では「なすこともなく、ものさびしさにまかせて」という意味になります。この「つれづれ」という言葉は、平安時代の詩人らが好んで使

用していた言葉の一つでありましたが、誰もこの『徒然草』という作品を生み出した吉田兼好のように、辛辣な意味をこの言葉に見つけ出した人はいませんでした。

『徒然草』には、「つれづれわぶる人」という言葉も出てきます。これは、「なすこともなく所在ないさびしさを、つらく思う人」という意味を持っており、兼好にとって「つれづれ」とは「心が他のことにひかれることなく、ただひとりである」幸福並びに不幸をいっているのです。だから、「つれづれわぶる人」は、真のつれづれを知らない、やがて何かで紛れるだろう人を指しているのです。

これらのことから、兼好は、なすこともなかったため『徒然草』を書いたのではなく、つれづれなるままに書いたということが分かります。

これだけの深い意味を文章から読み解くためには、やはり読書することが必要不可欠です。読書を習慣にすることによって、今まで見えてなかったものが見えるようになり、景色も変わってゆくことでしょう。本を普段読まない方は、まず高専図書館に足を踏み入れることから始めてみましょう。

専攻科生より

高専。本。

創造工学専攻2年
岡田 修一郎



香川高専に入学して7年が経ちました。入学当初は40人いたクラスメイトも最後は6人しか残りませんでした。専攻科に進んだ僕たちが上澄みなのか残りカスなのかは分かりませんが、自分なりに精一杯努力してきたと思います。自分自身の実力を着実に積み上げてこられたと確信できるのは図書館で読んだ本の厚みのおかげかもしれません。僕の高専生活において図書館の存在は大きな割合を占めていたと言えます。本科ではずっと図書委員を担当しており、専攻科では図書館アルバイトを勤めていました。なんとなく図書館に関する役職を続けてきましたが、これはやはり本が好きだったからだと思います。

僕が本を読み始めたのは小学1年生ごろです。このころが一番本を読んでいた時期で1日に5~10冊は本を読んでいたと思います。本といっても小さな絵本で厚さ5mm程

度のうっすい本でしたが夢中で読み進めていました。中学生になると星新一のショートショート（とても短い小説ジャンル）SF作品を読み漁りました。どれも10ページほどで完結し、オチも面白くとても読みやすかったという記憶があります。とにかく、僕は今まで分厚い本を読破した経験はほとんどありませんがたくさんの本を読んできました。この経験によって自然と鍛えられた論理的な思考や創造性は、工学系学生である僕にとってとても有意義であったと思います。みなさんもぜひ本を読んでみてください。難しい本を読んだから偉いとか分厚い専門書を読んでないからダメということはありません。絵本でもマンガでも電子書籍でも、とにかく文章に触れてみてください。きっとみなさんにとって良い結果をもたらすと思います。ちなみに僕は来年から東京に進学するので『るぶ』を買って読みたいと思います。

最後に、みなさんにおすすめの本を紹介します。僕が本を好きになるきっかけとなった本です。どちらもAmazonレビュー星4越の名作です。

『日本昔ばなしアニメ絵本 18冊全巻セット』 永岡書店
『ポッコちゃん；ようこそ地球さん』 星新一 著 新潮社

本に慣れる

電子情報通信工学専攻2年
西園寺 嶺



みなさんは普段どれほど本を読んでいるでしょうか。高専生のみなさんは、普段はあまり本を読まないという方が多いかと思います。特に学年が上がっていくと授業も難しくなったり、研究や進学・就活の準備に忙しくなったりと、貴重な時間を読書に充てるのが難しくなってくると思います。また、研究や進学・就職の準備のための参考書などを触れる機会は増えても、これまで本を読む習慣がなかったため参考書を用意したもののみ勉強が捗らないといった学生が多いと感じられます。テスト前にも教科

書などの本を読んで勉強している学生が少ないように感じられます。そこで、私がおすすめるのは低学年のころより読書をする習慣を身につけ、本を読むという行為に慣れることです。ですが、いきなり専門書などを読むというのはなかなか難しいと感じられるかもしれません。ですので、まずは文学的な書籍を通じて本を読むという行為に慣れることが大切だと考えます。文学的な書籍というのは、みなさんが日々励んでいる工学分野の勉強とは直接関係はありません。しかし、本を読むことに慣れておけば、後々、参考書や専門書といった本を読む際に抵抗なく勉強を進めることができると思います。間接的にはありますが、本を読む習慣を身につけることは勉強の助けになると思います。図書館には、様々な参考書や専門書を初め、文学的な書籍も多数置いてあります。ぜひ図書館を利用して本を読む習慣を身につけてもらいたいです。

図書館紹介



● 高松キャンパス

高松キャンパス図書館では、学生の皆さんに少しでも本への関心を持ってもらい、快適で利便性の高い図書館を目指して取り組んでいます。その取り組みの一環として、今年7月、図書室入り口ゲートを通してすぐに目に付くところに、次の4種類のシリーズを取りまとめたコーナーを新設しました。

- ①トコトンやさしいシリーズ
- ②まんがでわかるシリーズ
- ③スバラシク実力がつくシリーズ
- ④絵解きでわかるシリーズ

①②④については、理系科目、特に専門科目に関する基礎的知識を確実に身につけたり、授業に関するより幅広い知識を習得したりするためにはうってつけの本ばかりです。また、③は、特にここ2～3年リクエストが増えている大学編入学および大学院入試対策本を取り揃えています。このコーナーを設置したことで、学生の皆さんからの問い合わせに対して、より迅速な対応が可能になりました。

また、今年度から技術士第一次試験や機械設計技術者試験など、各種資格試験の受験料の補助を学校に申請することができるようになり、学生の皆さんの資格試験への関心が高まってきています。それに伴い、資格試験対策に関するコーナーも新設しています。今後も学生の皆さんのリクエストにできるだけお応えしながら、より充実した図書館を目指していきます。

● 詫間キャンパス

詫間キャンパス図書館には、就職試験、資格試験、大学進学用の資料をまとめたコーナーがあります。蔵書検索システムで配架場所が「(詫間)資格試験・就活」と表示されるコーナーです。普段あまり図書館を使わない方でも、卒業までに一度はこのコーナーを覗くのではないのでしょうか。

このコーナーは特定の時期に利用が集中するため、借りたい時に資料が書架にない場合や、古い資料しかない場合があるかもしれません。その際は遠慮なく職員にご相談ください。予約や、新しい資料の購入など、できるだけ学生の皆さんのお手伝いができるよう対応します。

※このコーナーにある資料

- ・「就職四季報 総合版」
- ・「無線従事者国家試験問題解答集 一陸技」
- ・「大学編入試験問題集 数学/徹底演習」等



編集後記

皆さんは、「奥付」という言葉を知っていましたか。「おくづけ」と読みます。実は私も、その存在は知っていましたが、つい最近まで「奥付」と呼ぶことを知りませんでした。「奥付」とは、本の終わりにある著者、発行者、発行年月日などを書いた部分のことです。洋書の場合は、本の初めのタイトルページにこれらの情報が書かれているようです。

皆さんは、レポートや卒業論文を書くとき、最後に参考にした文献を書きますが、書籍の場合、普通は著者、書名、出版社、引用ページ、出版年を書きます。これらのほとんどの情報が「奥付」に含まれています。書籍で調べ物をするときは「奥付」も写しておくことを勧めます。

皆さんに二つお知らせがあります。

平成23年より年2回配布していた「図書館だより」ですが、来年度より年1回冬頃の発行になります。「図書館だより」に掲載していた貸出ランキングなどは、図書館ウェブページに掲載しますので、そちらを参照してください。

詫間キャンパス図書館では、10月より、「人生の役に立つ本」というテーマのコーナーを設け、いろいろな先生方を選んで頂いた本を展示することになりました。図書館を訪れた際は、覗いてみてください。

(詫間キャンパス図書館長)